

## 久保田暁一先生をしのぶ

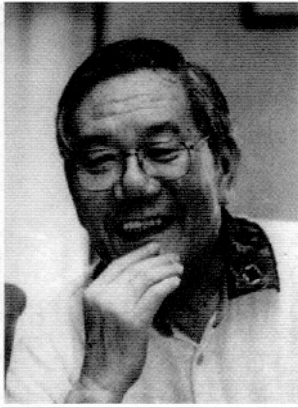
多胡 賢

久保田先生との出会いは、月刊誌「致知」読書会―木鶏クラブの会長となられてからとなる。わずか十二年前後の短い期間しかお教えいただく時がなかったことが残念でたまらない。

それまで先生のごことは元高校の先生であったということしか私の予備知識はなかった。ところが月一回の木鶏クラブでの会合で、折に触れお話しされることをお聞きするたびに、新鮮な感情を抱くようになった。それは先生が文筆活動をされていることを知ることによるものと気付いた。私自身が幼いころ、小説家に憧れていたせいもあるのだが……。

小説【小野組物語】【波濤】、【近江の湖畔に在りて】（随想と歴史探訪）、またそこから【湖笛】

【湖北の女】水上勉作品を親しむこ



在りし日の久保田暁一先生

ととなった。

又、交友のあった森信三の【修身教授録】に学び一般社団法人「実践人の家」に加入、夏期講習会に参加するようになった。私自身市の教育委員を務めていた時期でもあり大いに資するところがあつたと感慨深い、これも先生のおかげです。

『私は教師として生かされてきたのである。私が本を出したり、私なりに文化活動をしたりするに至っているのも、教職にあつて「いかに生くべきか」を考え、求める機会に恵まれてきたからである』と回想されている。家庭の事情で二十八歳の時生涯を郷里高島の地に埋めようと決意、藤樹先生を師の一人として仰ぎ学びながら、隣人の力になれる働きができるように志向していこう、妻とともに力を合わせて精いっぱい生きていこうと心に刻まれたと聞く。

お体に不自由を感じられ、実践人の家夏期研修会に三回、京都実践人の講習会に二回、先生夫妻と同行できたことが懐かしく思い出される。尊敬する夫妻と狭い車内で同じ空気を吸っている、至福の時であつた。

## 久保田暁一先生を偲んで

徳丸 和枝

『湖畔の声』は、先生がライフワークとされているキリスト教文学者の三浦綾子、遠藤周作、椎名麟三が主に連載されています。ご自宅に伺うと、必ずこの『湖畔の声』の読後感想を求められ、木鶏クラブの資料をお渡しすると「○○さんも頑張ってるなあ」と、先ず賞めて下さるのが常でした。

特に、近藤重蔵の取材旅行の話や、三浦綾子氏との往復書簡の話も懐かしく語られました。キリスト文学にとどまらず、「悪人正機説」や、中部女子短大紀要に発表された倉田百三論も語り合えたことは、至福の時間でもありました。

平成二十四年四月から高島藤樹会の研修委員会で『翁問答』を学びます、とお伝えすると、自分も参加したいとおっしゃって、毎月一緒にするようになりました。学習会では、ご自分の書き込みされた藤樹ノートを持参され、話し足りないところを「だるま通信」でまとめられ、次回の学習会に皆で再読することもありました。

「実践人」の新理事長に滋賀県の広瀬童心先生が就任されると、高島市で実践人の読書会を是非立ち上げたいと『森信三訓言集』を準備され

て呼びかけられ、十九名の道友による読書会がスタート致しました。その年の忘年会は、木鶏クラブと合同で開催されましたが木鶏クラブの発足も先生の発案によるものだった、と先生を偲んでのつどいは、家族の団らんそのものの光景でした。

お身体も言葉も少しずつ不自由になりながらも、尽きることのないエネルギーな向上心に、道友たちの敬慕なまなざしを何度目にしたことでしょうか。

京都で文芸作家の会があつた折は、会場で車椅子が用意されて嫌だった、と話され、本当にぎりぎりまで自力で歩くことを望まれました。ですから外出時はいつも奥様の付き添いで移動されましたが、ご自分で「1・2!、1・2!」と声に出しながら足を運んでおられた姿が印象に残っています。

お家の中の転倒や訪問リハビリが始まってからは、例会の参加はかなわなくなりましたが、実践人の研修会や全国大会では、読書会の口火を切って下さった先生!と、全国の多くの道友が先生を慕い、先生の周りに集まり、その都度に片手を挙げて「ヨッ!」と挨拶を交わしながら、慈愛の眼を注いでおられた姿が、偲ばれます。